

Title	週刊紙Septと若きカトリック知識人たち
Sub Title	Sept et les jeunes intellectuels catholiques
Author	松本, 鉄平(Matsumoto, Teppei)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2017
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.22, (2017. ) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20171201-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20171201-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 週刊紙 *Sept* と若きカトリック知識人たち

松本 鉄平

週刊新聞 *Sept* (1934年3月-1937年8月)は、新トマス主義の流れを汲み、社会問題に目を向けるカトリック改革派を中心とした言論の場だった<sup>1</sup>。当時は人民戦線やファシズムなどが拮抗する時期にあつて、キリスト教勢力の動向は見えにくくなっている。しかしそこには連綿と続く水脈があり、彼らは第二次大戦後のフランスにおいても看過できない存在であつた。*Sept*は、その流れの短くも重要な結節点の一つである。本論では、その中からとりわけ寄稿の多かつた4人の若きカトリック知識人<sup>2</sup>、すなわちジョゼフ・フォリエ、ダニエル＝ロップス、ピエール＝アンリ・シモン、アレクサンドル・マルクを取り上げる<sup>3</sup>。*Sept*に関しては、新聞全体の思想的傾向を扱った先行研究はあるものの<sup>4</sup>、各人の問題意識や議論については省略された部分も多いからだ。したがって、それぞれの論点を浮かび上がらせ、最後にその底流にあると思われる概念の特徴についても指摘することにした。

---

<sup>1</sup> 松本鉄平「週刊紙 *Sept* とキリスト教聖職者たち」、『藝文研究』第112号、2017年、pp. 163-176。

<sup>2</sup> 「カトリック知識人」という語は一見矛盾を孕んでいる。体制を批判する「知識人」と、教会の権威に従う「カトリック」は相反する。しかしジュリアルによれば、フランスでは体制そのものが反教権化しカトリックが少数派になったため、「カトリック知識人」が生まれたのである (Jacques Julliard, « Naissance et mort de l'intellectuel catholique », *Mil neuf cent*, n°13, 1995, pp. 5-7.)。

<sup>3</sup> 本研究は、2017年度「慶應義塾博士課程学生研究支援プログラム」を受けて行われた。各号については Gallica のデータベースを参照。

<sup>4</sup> Aline Coutrot, *Un courant de la pensée catholique l'hebdomadaire Sept*, Edition du Cerf, 1961. なお注での記事の表記法は同書に準じたが、便宜上タイトルは追加した。また複数の著者を引用する節では、著者名も追加する。

# 1

ジョゼフ・フォリエ (Joseph Folliet, 1903-1972) は *Sept* の創刊者ベルナド神父の右腕的存在で、事務や編集に深く携わっていたが、自らも多くの記事を残した。なかでもまず注目したいのは、アルジェリアやモロッコでの現地取材によるルポルタージュ連載である。

アルジェリアへの調査旅行は 1935 年に行われた<sup>5</sup>。現地民の反仏感情の高まりを直に感じつつ、これに対抗する入植者たちの極右リーグへの参加が進む状況にも危機感を覚えている。ただしフランスの影響が深く長かったアルジェリアの場合、モロッコやチュニジアと違って、独立へ向かうようなナショナリズムは不可能という見解も示していた。実際、のちにアルジェリア戦争で有名になるフェルハート・アッバース (Ferhat Abbas, 1899-1985) の講演に出席しているが、この時期のアッバースは、フランスへの反乱よりも、フランスの内部でアルジェリアの地位を向上させることを重視していたことが分かる。さらに、アルジェリア民衆に人気の高かったイスラム知識人タイエブ・エル＝オクビ (Tayeb El-Okbi, 1889-1960) や、ベン＝バディス (Abdelhamid Ben Badis, 1889-1940) などにも会っており、特にエル＝オクビへのインタビューではイスラム教内部からも改革派運動が起こっていることを知って、自分たちとも重なる彼らの動向に関心を寄せている。

モロッコでの一連の取材は 1937 年のことであつた<sup>6</sup>。異様に欧州化されたラバトを始め、カサブランカのスラムや病院なども視察し、フランス人とモロッコ人の関わり合いのなさや、物乞いの多さに驚いている。また、モロッコのカトリック会合に参加しているのだが、モロッコの庶民生活に深く根

---

<sup>5</sup> « L'Algérie au Carrefour (1) », *Sept*, 10 mai 1935 ; « L'Algérie au Carrefour (2) », *Sept*, 17 mai 1935 ; « L'Algérie au Carrefour (3) », *Sept*, 7 juin 1935 ; « L'Algérie au Carrefour (4) », *Sept*, 14 juin 1935.

<sup>6</sup> « Printemps Moghrébin (1) », *Sept*, 30 avril 1937 ; « Printemps Moghrébin (2) », *Sept*, 7 mai 1937 ; « Printemps Moghrébin (3) », *Sept*, 14 mai 1937 ; « Printemps Moghrébin (4) », *Sept*, 4 juin 1937.

差したイスラム教に対して、キリスト教は遠く及ばないことを自覚しており、布教するとしても相当時間をかけねばならないと考えていた。

ここにチュニジアも加えた北アフリカ諸国での、増加する反植民地事件の原因について、フォリエは経済的貧困と精神的不満を挙げている<sup>7</sup>。ただしアルジェリアの場合、経済の回復と、自治の付与に加えて、反政府運動を反仏運動と混同しないこと、宗教問題化させないことなど、のちのアルジェリア戦争でフランス側の争点となる側面もすでに指摘している<sup>8</sup>。

フォリエは *Le Veilleur* という偽名も持っていた。もっぱら若者の問題に光を当て、彼らに向けて語りかける記事を 100 本以上書いている。

彼は、若者の厳しい日常に関心を持っていた。「強制された怠惰」(*la paresse obligatoire*) としての失業問題のほか、ヴァイヤン＝クーチュリエ (Paul Vaillant-Couturier) や、セリーヌ・ロット (Céline Lhotte) などの調査も紹介し、悲惨な生活や労働の実態を読者に伝えている<sup>9</sup>。より詳細に取材し、報告しようとするときには、フォリエ本人の署名を使って、8 区レティロ街に出来た若者支援施設の館長の話や<sup>10</sup>、当時の大手スーパー・プリズユニック (現在はモノプリ系列に吸収) の生々しい女性従業員の生活環境を伝えている<sup>11</sup>。そのほか特筆すべきは、ナチスの台頭によりドイツで迫害を受け始めたカトリック青年たちの窮状を伝える記事である。宗教活動によって投獄された彼らは、オラニエンブルクの強制収容所や、ナチスの刑務所の実態をフォリエに語る。ドイツの若いカトリックたちの難民支援を呼びかけた際には、フォリエ本人に連絡するよう指定しているほどだ<sup>12</sup>。

---

<sup>7</sup> « Tempête sur l'Afrique du Nord », *Sept*, 16 novembre, 1934.

<sup>8</sup> « L'Algérie n'est pas perdue », *Sept*, 15 mars 1935.

<sup>9</sup> « La paresse obligatoire », *Sept*, 23 novembre 1934 ; « Malheur d'être jeune », *Sept*, 19 juillet 1935 ; « Révélations stupéfiantes », *Sept*, 22 mai 1936.

<sup>10</sup> « Visite au Foyer du Rétiro », *Sept*, 12 mai 1934.

<sup>11</sup> « Une demoiselle des Prisunic », *Sept*, 21 Septembre 1934.

<sup>12</sup> « Pour une communauté de souffrances », *Sept*, 7 décembre 1934 ; « Confesseurs », *Sept*, 16 août 1935 ; « Appel aux enchaînés », *Sept*, 24 avril 1936.

最も Le Veilleur が力を入れたのは、そうした若いカトリックたちの受け皿となるさまざまな団体の活動を紹介することだった。労働問題においては、キリスト教系労働組合 C.F.T.C.とリヨン社会問題研究所 Secrétariat social de Lyon が主催する労働者教育の場や、社会問題のキリスト教系監視機関として現在も続く Semaine sociale、さらに農業分野に関しても、地方でのカトリック農民向け行事を紹介している<sup>13</sup>。学生については、カトリック学生連盟 F.F.E.C.や、カトリック青年組織 A.C.J.F.系の学生団体 J.E.C.の記事がある<sup>14</sup>。さらにおそらくフォリエ主催の「聖フランシスコの同伴者たち」(les Compagnons de Saint François)と思われる活動報告も忘れてはならない<sup>15</sup>。

この場合も、より詳細に伝えるときには、フォリエ自身の署名であった。5区ミュチュアリテ会館でのA.C.J.F.の交流行事、Sept主催によるリヨンでの地方大会のほか、パリ・カトリック学院60周年イベント、カトリック青年農民団体J.A.C.の第一回大会のレポートなどである<sup>16</sup>。

その一環として、各種団体の代表者へのインタビューも行った。A.C.J.F.の代表ドゥブレ(André Debray)、リール・カトリック学院の学生連盟代表ロアール(Gaston Rohart)、上述のSemaine socialeの創設者ゴナン(Marius Gonin)、パリ社会問題研究所の代表エブレ(Maurice Éblé)、C.F.T.C.代表のジルネルド(Jules Zirnheld)などとの対話を載せている<sup>17</sup>。ほかにもこうし

---

<sup>13</sup> « Université ouvrière », *Sept*, 21 juillet 1934 ; « Dans les Semaines sociales », *Sept*, 4 août 1934 ; « Semaines rurales », *Sept*, 25 janvier 1935.

<sup>14</sup> « Le danger temporel », *Sept*, 6 mars 1936 ; « La Chrétienté des étudiants », *Sept*, 6 novembre 1936 ; « Une exposition d'A.C.J.F. », *Sept*, 10 avril 1936.

<sup>15</sup> « De la route... », *Sept*, 18 août 1934 ; « La route encore... », *Sept*, 25 août 1934 ; « Jeunes routiers », *Sept*, 8 Septembre 1934 ; « Vers Rome, vers Assise », *Sept*, 16 avril 1937.

<sup>16</sup> « Printemps de Chrétienté », *Sept*, 2 novembre 1934 ; « La manifestation de Lyon », *Sept*, 5 février 1937 ; « L'Institut Catholique de Paris fête ses Noces de Diamant », *Sept*, 31 mai 1935 ; « Le premier Congrès de la J.A.C. », *Sept*, 13 Septembre 1935.

<sup>17</sup> « Un quart d'heure avec André Debray », *Sept*, 3 mars 1934 ; « Sur le Catho de Lille », *Sept*, 16 novembre 1934 ; « Le Secrétariat social de Lyon », *Sept*, 7 décembre

た活動のルーツとなった重要人物を紹介することもあり、先述した J.O.C. の先駆者カルディン神父 (Joseph Cardijn) や、ボーイスカウト運動の発明者ベーデン＝パウエル卿 (Robert Baden-Powell)、そして A.C.J.F. の創立者アルベール・ド＝マン (Albert de Mun) やアンリ・バジール (Henri Bazire) などの功績を、若者に教える機会でもあった<sup>18</sup>。

こうしたさまざまな活動を支えるために、アクション・カトリックというキリスト教の新しい社会運動のあり方に関する思想が援用された。1937 年フォリエは自らの署名で、数週にわたり大々的にこのテーマを考察している。

アクション・カトリックという運動の目的とは、あくまで「布教」だというのがフォリエの定義である<sup>19</sup>。ただし「布教」といっても、政党のように派閥の拡大を意味するのではない、とフォリエは語る。「政治からは距離を置く」べきであり<sup>20</sup>、党派を形成しようとする「政治的な術や技法」も遠ざけるべきとする<sup>21</sup>。つまり、あくまで精神的な次元での魂への働きかけに終始せよ、と。ただし新しい布教の方法として、その周辺環境 (milieu) の具体的な条件を良く理解することを要求し、一般信徒を活用することを求めた<sup>22</sup>。というのも一般信者において、それぞれの境遇、階級、政治的傾向は一様ではないからだ。「各環境にあわせて特殊化しながら適応し」、布教し

---

1934 ; « Le Secrétariat social de Paris », *Sept*, 11 janvier 1935 ; « Histoire de la C.F.T.C. », *Sept*, 25 juin 1937.

<sup>18</sup> « J.O.C. à l'honneur », *Sept*, 1<sup>er</sup> février 1935 ; « hommage aux précurseurs », *Sept*, 23 août 1935 ; « Salut à B.P. », *Sept*, 25 décembre 1936 ; « Le cinquantième de l'A.C.J.F. », *Sept*, 7 février 1936.

<sup>19</sup> « L'apostolat, et donc l'action catholique sont une perpétuelle entreprise de conversion. » (« La fin de l'Action catholique », *Sept*, 14 mai 1937. )

<sup>20</sup> « l'action catholique se tient à l'écart de la politique » (« Distinguer pour Unir », *Sept*, 11 juin 1937.)

<sup>21</sup> « L'action catholique, [...] s'interdit, en raison de son appartenance au spirituel, non seulement la politique de parti, mais toute incursion dans le domaine de la science et de l'art politique. », (« Action catholique et politique », *Sept*, 18 juin 1937.)

<sup>22</sup> « Les méthodes de l'Action catholique », *Sept*, 4 juin 1937.

ていく必要があるだろう<sup>23</sup>。

しかしながら他方で、フォリエは共産主義とは合流できないと述べている。キリスト教と唯物論の根本的な矛盾に加え<sup>24</sup>、共産主義者たちがJ.O.C.所属のカトリック青年を集団リンチしたサルトル・ヴィルの事件や、ソロヴェツキー諸島の強制収容所などに言及しながら<sup>25</sup>、「暴力的な手段<sup>26</sup>」(ces procédés violents)を用いる「全体主義の最も首尾一貫して完成された形態」(la forme la plus achevée et la plus logique du totalitarisme)を、彼らに感じていたからだと思われる<sup>27</sup>。ただしフォリエは共産主義だけでなく、同様の点で、高まる外国人排外主義、右翼団体アクション・フランセーズやジュネス・パトリオット、左翼団体ジュヌ・ガルドなどの示威行動にも懸念を示し、左右問わず過激派に対して批判を投げかけていたのだった<sup>28</sup>。

## 2

ダニエル＝ロップス (Daniel-Rops, 1901-1965) とは、アンリ・プティオという人物の偽名である。彼は非常に多筆で、150を超える記事を *Sept* に提供しているのみならず、同時期に小説や時評などの著作も出版している。彼の場合、基本的にエッセイ風の時評、書評、論説が中心となっている。

ダニエル＝ロップスもまた、貧困の問題に多くの関心を寄せていた。彼は読者に手紙報告を呼びかけて、生々しい貧困の実態を調査したり、具体的な数字を挙げて、さまざまな事例を伝えている。ホームレスが集まる夜のセー

---

<sup>23</sup> « l'action catholique [...] devra s'y adapter, endossant un spécialisation qui varie avec les milieux. » (ibid.)

<sup>24</sup> « L'alliance impossible », *Sept*, 25 octobre 1935.

<sup>25</sup> « Réponse à *L'Avant-garde* », *Sept*, 15 novembre 1935.

<sup>26</sup> « Lettre ouverte à M. Thorez », *Sept*, 29 janvier 1937.

<sup>27</sup> « Réponse à *L'Avant-garde* », *Sept*, 15 novembre 1935.

<sup>28</sup> « Grève des étudiants », *Sept*, 8 février 1935 ; « Xénophobie », *Sept*, 22 février 1935 ; « Grève au Quartier latin », *Sept*, 24 janvier 1936 ; « J.G.S. », *Sept*, 18 Septembre 1936.

ヌ川沿いの土手や、場末の路上などの様子<sup>29</sup>、13区にあったジャンヌダルク団地 (la cité Jeanne-d'Arc) の過密な住環境<sup>30</sup>、「あばら屋」(taudis)に住むパリの住民が20万人にのぼり、3区～5区では20部屋ごとに100人が暮らしているという状況<sup>31</sup>、小学校の女性教員が共働きで公務員と結婚すると、住宅補助などが打ち切られ、所得が15.000フランから一気に8.000フランにまで下がるという制度上の問題<sup>32</sup>、最低で月800フラン必要とされるパリ(地方だと600フラン)で、月平均600フランの奨学金だけでは足りず、アルバイトを探してやりくりしている学生たちの様子<sup>33</sup>、水が淀み臭う路地で、bicotと蔑称されるアラブ人たちが詰め込まれたように暮らすバラック家屋のさま<sup>34</sup>、第二帝政期のオスマン改造によって貧民と富裕層の地区が分断されたパリの姿<sup>35</sup>、既婚で子供のいる大学教員が月1100フランの給料を受け取った当日に、家賃・石炭代・食費などで、400フランしか手元に残らないという現状<sup>36</sup>、革命によって亡命した在仏ロシア人7万2000人の多くが、ナンセンパスポートも不十分で労働許可も得られず、不法状態を余儀なくされている状況など<sup>37</sup>、詳細に報告している。

またフォリエと同じく、若年層の悲惨な境遇についても取り上げていた。さまざまな子供への虐待事例、感化院の惨状、若い女性労働者の生活などを告発している<sup>38</sup>。

この貧困問題と対になっているのが、拝金主義への批判である。ダニエル

---

<sup>29</sup> « Pour ma maison », *Sept*, 21 avril 1934.

<sup>30</sup> « Pour Jean Coste », *Sept*, 19 mai 1934.

<sup>31</sup> « Misère et Taudis », *Sept*, 18 octobre 1935.

<sup>32</sup> « On travaille pour la divorce », *Sept*, 25 octobre 1935.

<sup>33</sup> « Misère studieuse », *Sept*, 10 janvier 1936.

<sup>34</sup> « Lutte contre les taudis », *Sept*, 13 mars 1936.

<sup>35</sup> « le Contraste », *Sept*, 12 juin 1936.

<sup>36</sup> « Du mépris de l'intelligence », *Sept*, 22 janvier 1937.

<sup>37</sup> « Émigrés », *Sept*, 30 avril 1937.

<sup>38</sup> « Enfance », *Sept*, 25 août 1934 ; « Éducation ou correction », *Sept*, 12 octobre 1934 ; « Jeunes travailleuses », *Sept*, 23 octobre 1936.

=ロップスにおいては、とりわけペギーへの言及が頻繁に見られるのだが、金銭を至上価値とみなし、神の代わりに金銭を主人とする、王となった金銭の悪魔のサイクルに強い嫌悪感を示したのだった<sup>39</sup>。

こうした現状の認識は、ダニエル=ロップスの心中に、「欠如と無秩序のなかで<sup>40</sup>」没落するフランスへの危機感を募らせることとなった。

だが彼もまた、このような危機を前にして共産とも右翼とも距離をとる。ヴィクトール・セルジュが告発したスターリン主義の非人間的な実態にも触れながら、共産主義とは我々にとって正面から戦うべき敵<sup>41</sup>、と明言していた。あるいは一方では、かつて急進黨内の社会主義派だったベルジュリらの Front social グループに対して、しかし他方では火の十字団系の若者右翼団体 *Volontaire national* に対しても、批判的な視線を向けていたのである<sup>42</sup>。

というのもダニエル=ロップスは、「人間的個人<sup>43</sup>」( *personne humaine* ) を擁護するからだ。ここでも彼はペギーから多大な影響を受けており、「精神的なもの、それ自体が肉体的なものである」という言葉を何度も引用しているとおおり<sup>44</sup>、「個人 ( *personne* ) 」とは、肉体と精神の「全的な結びつき<sup>45</sup>」、「精神が肉体と地上の生において一つとなった被造物<sup>46</sup>」だと考えていた。

---

<sup>39</sup> « L'Argent », *Sept*, 3 mars 1934 ; « D'autres témoignages », *Sept*, 8 Septembre 1934.

<sup>40</sup> « Ce qui renaît », *Sept*, 10 avril 1936.

<sup>41</sup> « Ainsi, dans l'abîme... », *Sept*, 27 novembre 1936.

<sup>42</sup> « Union ? Regroupement ? », *Sept*, 8 novembre 1935.

<sup>43</sup> この文脈での「*personne*」は通例「人格」と訳されるが、*Sept* においてはまず自由主義的な「個人 (*individu*) 」との対比が含意されており、ここが見えなくなる訳語は避ける必要があった。しかし今のところ他の適切な訳はなく、仕方なく暫定的に「個人 (*personne*) 」 「人間的個人 (*personne humaine*) 」とした。

<sup>44</sup> 受肉に関する直接の引用は以下の記事 : « Nos Dilemmes », *Sept*, 29 mars 1935 ; « Deux livres et la France », *Sept*, 29 mai 1936 ; « Spirituel », *Sept*, 11 décembre 1936 ; « Une interview de M. Daniel-Rops », *Sept*, 5 mars 1937.

<sup>45</sup> « une liaison totale, une mutuelle responsabilité entre la chair et l'esprit » (« Résurrection », *Sept*, 19 avril 1935.)

<sup>46</sup> « l'homme, créature de chair et d'âme, mais en qui l'âme est unie à la chair dans la

こうした議論を十週以上にわたって明確化したのが 1936 年の長文連載である。そこでダニエル＝ロップスは、フランスの陥っている危機（「転換点」）の原因とは何なのかを考察している。彼によると、それはペルジヤーフが言うところの、共約不可能な「歴史」と「個」の運命の矛盾という、出口なき悲劇のなかで、人間的個人を否定するに至るヘーゲル的な歴史法則によって、歴史的決定論への向き合い方がわからなくなっているからである<sup>47</sup>。フランスが抱えるさまざまな分裂要因（過疎・高齢化・移民）のなかで<sup>48</sup>、人口的・経済的に厳しい立場にある現在のフランスにおいては、神話的虚構としての「地理」「人種」「国家」「文化」などによって人々の再統合を果たすことはできない<sup>49</sup>、と述べている。

彼が提出するのは、むしろ「フランスとは多様性である」という逆立ちした定義であった<sup>50</sup>。この多様性、あるいは「複雑性」(cette complexité)、「矛盾」(ces contradictions)は、フランスの個人主義というものが、「国家や社会や経済の脅威から人間を守るという原則」に由来するがゆえのものである<sup>51</sup>、と彼は言う。ダニエル＝ロップスが思い描くのは、そうした運命的な分裂を抱えたフランスだからこそ、人間の擁護を掲げるキリスト教の価値観が呼応しうるのではないか、ということであった<sup>52</sup>。

---

vie terrestre » (ibid.)

<sup>47</sup> « Tournant de la France », *Sept*, 17 juillet 1936.

<sup>48</sup> « Contradictions », *Sept*, 31 juillet 1936.

<sup>49</sup> « Chances et Malchances », *Sept*, 7 août 1936.

<sup>50</sup> « C'est bien plutôt de la diversité de la culture française comme de la géographie, de la race, de la sensibilité française, qu'il faut dégager le sens. » (ibid.)

<sup>51</sup> « l'individualisme français procède d'un mouvement d'âme juste dans ses principes, qui est de préserver l'homme de toutes les menaces que la société, l'économie, l'État, font peser sur lui. » (ibid.) ; « Deux livres et la France », *Sept*, 29 mai, 1936 ; « Penser avec les mains », *Sept*, 15 janvier 1937.

<sup>52</sup> « Une foi », *Sept*, 25 Septembre 1936.

### 3

ピエール＝アンリ・シモン (Pierre-Henri Simon, 1903-1972) は、より論説的な記事を多く投稿している。彼は、同時代のフランスにおいてもいち早く「全体主義」の問題に関心を寄せ、その考察と批判を行った。

ナショナリズムの高まりによる外国人排斥問題は、シモンにとって受け入れがたいものだった。全体主義は「フランス文化の鍵である個人 (personne) の自由」を犠牲にするからだ<sup>53</sup>。すなわち外国人を追放することは、「フランスの魂の一部を追放する」ことと同じである<sup>54</sup>。

おそらくこうした排外的な全体主義への危惧ゆえ、彼はキリスト教聖職者が政治権力を操作する聖職者至上主義に反発している<sup>55</sup>。

とはいえ、キリスト教徒も宗教的な良心を、社会に関する良心と向き合わせ、調和を試みねばならない<sup>56</sup>。彼の公教育と宗教、または統一学校 (école unique) の議論もこの課題に属する<sup>57</sup>。

だから全体主義的傾向とは区別されるような仕方での、政治社会への関わり方を考える必要がでてくるのだった。それが、カトリックと近代社会の関係の歴史を振り返りながら、全体主義とは異なるあり方を考察した 1935 年から 1936 年初頭にわたる長期の連載記事である。

カトリックが近代社会に対して抱いてきたジレンマは、実際に社会問題に取り組みようとすると、世俗社会に従属してしまつて信仰を裏切るか、信仰のために社会から完全に孤立するかしかなくなることであった<sup>58</sup>。エミール・コンブらによる政教分離の政策も激化して、共和国とはまったく別に社

---

<sup>53</sup> « L'idée de liberté personnelle, clef de voûte de notre culture française, ils la bafouent et l'immolent volontiers sur l'autel de l'État totalitaire. » (« Patriotisme n'est pas xénophobie », *Sept*, 3 mai 1935.)

<sup>54</sup> « ... à l'instant même où il chasse de la France ses camarades d'un autre sang, il chasse un peu la France de son âme. » (ibid.)

<sup>55</sup> « Moi, anticlérical », *Sept*, 30 août 1935.

<sup>56</sup> « De quelques vérités générales », *Sept*, 18 octobre 1935.

<sup>57</sup> « Actualité de l'école », *Sept*, 7 avril 1934.

<sup>58</sup> « De quelques erreurs historiques », *Sept*, 1 novembre 1935.

会問題に取り組むしかないような時期もあった<sup>59</sup>。それが好転したのは第一次大戦後であり、社会問題に関しては急進党との連携も不可能ではなかったが、そうなるとう共和国の枠組みのなかで、例えばカトリック政党のような形でかかわらざるをえなくなる。

そこでシモンは、ジャック・マリタンにおける、現実社会への関与および距離の取り方を参照する。その影響を受けてシモンが唱えるのは、「右であれ左であれ、党の正統教義に従うよりも前に、教会の精神に属する<sup>60</sup>」という態度であった。

このときシモンが持ち出してくるのは、「複数主義<sup>61</sup>」という概念である。より正確に言えば1936年初頭の段階では、「政治的複数主義<sup>62</sup>」(pluralisme politique)と呼ばれており、上述のようなカトリックによる政治社会への関わり方の文脈で編み出されたものである。それは最低限の掟(人間の個人・正義・真理)さえ守れば、さまざまな政治的主張や政党に加わって活動しても構わない、という主張である。むしろ多様な党派に散らばって、そこで忠誠の徳を実践するのは望ましいことである、と。それゆえ固有の「カトリック政党」という具体的な政治団体を形成することには懐疑的だった<sup>63</sup>。

こうしてカトリックによる社会参加のための「政治的複数主義」の議論は、約1年後、1936年末から1937年初頭にかけての「権威」に関する一連の論考において、国家の問題へと敷衍されることになる。

シモンは全体主義国家の特徴を抽出しようとした。「全体主義国家は、人

---

<sup>59</sup> « De quelques erreurs historiques (suite) », *Sept*, 8 novembre 1935.

<sup>60</sup> « j'ai dit seulement que, de droite ou de gauche, il devait être de l'esprit de son Église avant d'être de l'orthodoxie de son parti. » (« Lettre sur l'indépendance », *Sept*, 3 janvier 1936.)

<sup>61</sup> 原語の「pluralisme」に対して「多元主義」という言葉を使用するのはあえて避けた。哲学上の多元論などと違って、シモンの念頭には現世での活動を支えるキリスト教の一元的な精神性という前提がある。

<sup>62</sup> « Résolution (2) », *Sept*, 17 janvier 1936.

<sup>63</sup> « Résolutions (1) », *Sept*, 10 janvier 1936.

間的個人 (*personne humaine*)を全面的に覆い尽くそうとし<sup>64</sup>、個人に直接介入するがゆえ、全体主義においては「中間集団」が抹消される<sup>65</sup>。

これに対抗して、複数主義国家は「有機的な多様性<sup>66</sup>」(*la diversité organique*)を重視するだろう。あくまで「社会は個人 (*personne*) の救済の一つの手段」(*la société est un moyen du salut de la personne*)であって、複数主義国家は人間のためにある<sup>67</sup>、と。それゆえ「権力の恣意的な使用による自由の制限はできるだけ頻度を減らし<sup>68</sup>、その代わり「至高の主人ではなく、忠実な奉仕者<sup>69</sup>」(*non le maître souverain, mais le serviteur fidèle*)としての法の整備に努める。それはつまり支配の法というより、調停や仲裁的な法のことであり、これは現在で言うところの「補完性原理 *principe de subsidiarité*」に近いものだと考えられる。

このような意味で複数主義は、完全な「放任」(自由主義)とも、過剰な「抑圧」(全体主義)とも等しく距離を置くのである<sup>70</sup>。

この複数主義は、経済面にも当てはめられる。上述のような自由主義的価値観に支えられた無政府状態としての資本主義を批判するシモンは、他方、労働時間などを画一的に規制する統制経済も国家主義的であるとみなす<sup>71</sup>。

---

<sup>64</sup> « il [l'État totalitaire] veut considérer, au lieu du citoyen abstrait, la *personne humaine* totale, et gouverner non pas seulement la vie civique, mais la vie intégrale de l'homme, son activité professionnelle, son intimité spirituelle même. » (« L'autorité de l'État », *Sept*, 20 novembre 1936.)

<sup>65</sup> « l'État totalitaire destitue les groupes intermédiaires naturels entre l'État et la personne. » (ibid.)

<sup>66</sup> ibid.

<sup>67</sup> « Schéma d'un État pluraliste », *Sept*, 18 décembre 1936.

<sup>68</sup> « il [L'État pluraliste] la [la liberté] limitera le moins souvent possible par un usage arbitraire du pouvoir » (ibid.)

<sup>69</sup> ibid.

<sup>70</sup> « l'État pluraliste devra se fixer, dans le domaine spirituel, à une égale distance des deux excès : l'abstention et l'oppression. » (ibid.)

<sup>71</sup> « Un pouvoir économique », *Sept*, 25 décembre 1936.

シモンが望むのは、各団体が「自由」に、「柔軟」に調整することであり<sup>72</sup>、そうした場を設けることであった。かくして「経済議会<sup>73</sup>」(parlement économique)という調整機関の発想が生まれ、コーポラティズムの概念へとつながっていくことになる。

#### 4

アレクサンドル・マルク (Alexandre Marc, 1904-2000) とは、ロシア系ユダヤ人 (現ウクライナ出身) アレクサンドル・マルコヴィッチ・リピアンスキーという人物の仏語名である。Sept にとって非常に貢献度の高い人物であるが、その関わり方は特殊であった。というのも、彼には Scrutator という偽名があり、見開き 2 ページの大半をほぼ毎週使って、国際情勢と国内外メディアの反応を整理していたのであるが、その一方でマルク自身の論説記事は少なく、いわば黒子のような役割を担っていたからだ。

パリバ銀行頭取のフィナリー氏をめぐる金権政治<sup>74</sup>などを取り上げながら自由主義の行き過ぎを常に問題視していたマルクは、「現代文明は行き止まりにある<sup>75</sup>」と感じていた。多くの国が「自由主義」から離脱しつつある世界情勢においては、この原理のもとで第一次大戦後の繁栄を謳歌してきたアメリカでさえ例外ではない。そしてマルクは、ルーズヴェルトの政策の行き着く先を、ソ連と同じ「国家主義」(Étatisme) であると予言した<sup>76</sup>。しかしそのソ連では、アメリカに先んじて推し進められた国家主義が、足踏

---

<sup>72</sup> « j'aimerais mieux un système plus souple, où chaque profession, dans chaque région, en déciderait librement dans la considération des conjonctures naturelles et particulières où elle se trouve. » (ibid.)

<sup>73</sup> ibid.

<sup>74</sup> « De la démission de M. Finaly aux projets de M. Auriol », Sept, 18 juin 1937.

<sup>75</sup> « La civilisation actuelle se trouve dans une impasse. » (« L'équilibre humain », Sept, 2 mars 1934.)

<sup>76</sup> « Au bout, l'expérience américaine viendra rejoindre l'expérience soviétique : Roosevelt et Staline communieront sous le signe de l'Étatisme. » (« U.S.A. et U.R.S.S. », Sept. 3 mars 1934)

み状態に入り、むしろ後退していると分析する。

そこで彼は、「瀕死の自由主義は交代されねばならない<sup>77)</sup>」と述べる。ただしそれは唯物論的国家主義によってではなく、「精神と人間の永遠の価値への回帰<sup>78)</sup>」、すなわちキリスト教的な視点の導入によってである。

具体的に言うと、たとえばマルクは、マルクス主義の間違いの一つを、「プロレタリア化の問題について経済的な観点だけで解決できる」と考えたことだと説明する<sup>79)</sup>。そうではなく、キリスト教的な価値観による視点を加えて、「非人間化」(dépersonnalisation) という社会・心理的な側面で考えねばならない。それゆえ問題は、「いかにプロレタリアに人格の意味と特権を回復させてやるか<sup>80)</sup>」であった。そのために彼が重視するのは、機械化による労働時間の短縮と余暇の拡大や、必要最低限の生活費が全員に保証される制度、個人資産(とりわけ不動産)の形成と充実を促進する政策などである。これらによって奴隷ではなく自発的な「協力者」(collaborateur) としての労働者を生み出すことができると考えたのだった<sup>81)</sup>。

## 5

ここまで、とりわけ投稿記事の多かった4人の若きカトリック知識人を取り上げてきた。それぞれに問題意識と手法があり、ときには相互に接近しながら、各人の文脈の中で思想を形成しようとしていたことが分かる。

しかしそれらの根底に流れているのは、全体主義や国家主義に抗う「個人

---

<sup>77)</sup> « Le libéralisme moribond doit être remplacé » (« Étatismes matérialistes », *Sept*, 7 avril 1934.)

<sup>78)</sup> « le retour aux valeurs éternelles de l'esprit et de l'humain » (ibid.)

<sup>79)</sup> « Un des défauts de la prétendue solution marxiste, c'est de croire qu'un problème aussi complexe que celui de la prolétarianisation – qui menace tout l'homme – pourrait être résolu dans une perspective étroitement économique [...] » (« Rendre à l'ouvrier sa dignité d'homme », *Sept*, 12 février 1937.)

<sup>80)</sup> « comment rendre à l'ouvrier prolétarisé le sens et les prérogatives de la personne » (ibid.)

<sup>81)</sup> ibid.

(*personne*)」の重視だった。*Sept* がペルソナリズムの理論雑誌ではない以上、その包括的な定義に踏み込むのは控えねばならないが、今回の研究から少なからず参考にしうる点として以下の三つを最後に指摘しておきたい。

一つは、「個人 (*personne*)」とは、政治学や法学におけるような権利や義務の主体概念というよりも、まずもってさまざまな境遇のなかで現実存在する個々の人間だということである。ダニエル＝ロップスは「現実の人間に基づくことがキリスト教の偉大な優位性」だと述べているが<sup>82</sup>、実際、フォリエにおける現地取材や聞き取り調査、ダニエル＝ロップスにおける読者からの手紙報告や具体的な事例レポートなどもこの傾向に由来するものとして理解すべきと思われる。

次いで、「個人 (*personne*)」は「受肉」概念を援用したものだという点である。既に述べたようにダニエル＝ロップスはペギーの受肉思想を何度も引用していたのだが、彼はプラトニズム的観念論との違いを強調し、精神的なものが「現世や肉体と結びつく契機」を重視することによって、現実の社会問題に取り組むことを正当化したのだった<sup>83</sup>。フォリエも受肉せる「人ー神」のキリスト像に言及しており<sup>84</sup>、そのイメージをアクション・カトリックによる「現世への関わり」と重ねている<sup>85</sup>。まさに一般信者はキリスト教の理想を「具体化＝受肉」するのだ、と<sup>86</sup>。

もう一つは、全体主義に抗する「個人 (*personne*)」を考えるにあたって、

---

<sup>82</sup> « la grande supériorité du christianisme est de se fonder sur un homme réel, où le bien et le mal coexistent » (Daniel-Rops, « Le sens de la probité », *Sept*, 11 août 1934.)

<sup>83</sup> Daniel-Rops, « Spirituel », *Sept*, 11 décembre 1936. ダニエル＝ロップスにおけるペギーの受肉概念からの引用については、注 44 を参照のこと。

<sup>84</sup> « l'Incarnation et la Rédemption, par lesquelles le Christ, Homme-Dieu réconcilie l'humanité avec la divinité. » (Joseph Folliet, « Les points de départ », *Sept*, 16 avril 1937.)

<sup>85</sup> « L'action catholique est spirituelle – mais de ce spirituel qui s'engage dans le temporel. » (Joseph Folliet, « La fin de l'Action catholique », *Sept*, 14 mai 1937.)

<sup>86</sup> « Le laïque incarne l'idéal chrétien dans un milieu donné. » (Joseph Folliet, « Les méthodes de l'Action catholique », *Sept*, 4 juin 1937.)

個人と集団の二項関係で考えるのではなく、そこに「普遍的なもの」を加えた三項関係で考えるべきではないか、ということである。本論で取り上げたカトリック知識人たちが全体主義に反対するのは、個人と集団とを対立するもの（排他関係）として考えているからではない。人間の個人は「社会的関係」を排除しない<sup>87</sup>。そうではなくて、個人（*personne*）には複数の共同体との関わりがあり、そのうちの一つにすぎないものに全人格を飲み込まれることを拒むからである。諸共同体に属しつつ支配もされず、かといって孤立したアトムの個人（*individu*）でもないのは、個人（*personne*）というものがあらかじめ「普遍的なもの」との関係を保証されているからにほかならない。実際、ダニエル＝ロップスはキリスト教的統合という「普遍的価値<sup>88</sup>」（*valeur universelle*）を、ピエール＝アンリ・シモンは「普遍的慈愛<sup>89</sup>」（*charité universelle*）を、念頭に置いていたのである。

しかしながら、ここで一つの疑問が生まれる。あくまで精神的な次元に留まるとされた普遍性が、具体的な会員数や施設をもった信者団体ですらない——少なくともそれらは付随するものであって、それら自体が普遍性を担うわけではない——のなら、その普遍性とはいったい何なのだろうか。全体主義の秘密警察や強制収容所のような物理的拘束力を伴わない、という意味で文化や道徳などを想定していたとも仮定できる。しかし共通性を前提とするそれらは、果たして普遍性なのか、あくまで広大な（キリスト教）共同体なのか。あるいは、それらとは全く異なるかたちで普遍性の問題を考えようとしていたのだろうか。その場合、より原理的な思索によって奇妙かつ興味深い議論を残したジルソンやマリタンの思想も考慮に入れねばならない。いずれにせよ、本論で取り上げた若きカトリック知識人たちは皆、当時まだ30歳を迎えただけだったということもあり、各人の議論がどのように深化や変遷を見せていったのかについて、引き続き調査していく必要があるだろう。

---

<sup>87</sup> « Que sont les personnes humaines si l'on ne tient pas compte du lien social ? » (Joseph Folliet, « La fin de l'Action catholique », *Sept*, 15 mai 1937.)

<sup>88</sup> Daniel-Rops, « Chances et Malchances », *Sept*, 7 août 1936.

<sup>89</sup> Pierre-Henri Simon, « Lettre sur l'indépendance », *Sept*, 3 janvier 1936.